

みんなで語る民放史

題字 中川 順

国際無線通信から転身して 民放開局に尽くした一技術者の回想

分部芳雄(TBS)

今回の民放史は、ラジオ東京(現TBS)初代送信所長だった分部さんに、戦前、戦中の国際無線電信電話、そして戦後の民放開局についてエンジニアの歩みをうかがいました。

インタビュー 池田徹也、中村登紀夫(TBS)

—お幾つになられたんですか
89歳になるんですよ。

「いいです」。それで半年くらい
本社にいて台湾に赴任した。

日本海海戦で東郷さんが「敵艦
見ゆ」と打電したくらい当時の日
本の通信は発達していた。あれは
火薬式高周波電流を起こしてたの
ね。ところが真空管になると大
きつた。僕が学校を出る頃やつと
10kwの送信ができる真空管が出来
て国際電話が無線で出来るようにな
った。それ以前は、長崎から海
底ケーブルで山東半島、そこで地
上に立ち上げ、モスクワ、独、仏

—お元気ですねえ

TBSの話になる前に私のエン
ジニアとしての歩みをお話ししま
しょう。昭和8年(1933)に

日大の専門部電気工学科を出たん
ですけど、就職難でね。学校の推
薦で東芝や海軍の技術研究所とか
受けてもみんなダメだった。秋に

今度はKDDの前身の国際無線電
話の会社を学校から紹介されたん
です。「新人で台湾に行く技術者
が必要なんだ。台湾でもいいか」

上に立ち上げ、モスクワ、独、仏
を通ってドーバー海峡を渡る経路
なんで途中で全部モニターされ
しまう。丁度、欧米に直接電話す
る通信基盤が出来た頃でした。



左、分部芳雄さん

遠藤幸吉さん(ラジオ東京初代技術局長、常務取締役)は開戦前にサイゴンで南方軍司令部の通信顧問になっていた。軍属ですね。

軍の嘱託っていうのは……笑い話だけ、飛行機に乗るのは将校が一番先、二番目が軍犬、軍馬、伝書鳩、次はP屋、判るでしょう、次が軍属、そして嘱託なんです。

最後が一般人。まあ最下級の待遇だつたけど威張つました。通信部隊参謀は神主の姿で、大学は文学部。大学出というだけで参謀なんだから、何も分からないんだ。

だから部下の教育を頼まれてね。

支社長は海軍少将でフランス大使館付の武官だったハイカラな人で、「分部君こういうことやりたいんだ」「やりましょう」で随分可愛がられて、他の人はサイパンだ、ジャワだと転勤したのに私はしなかった。ツイてたんだね。

19年に本社から帰つてこいつて命令があつたけど交代がこない。そこへ、最後の帰還船といわれた阿波丸がきてね、「君、これが最後の機会だ」と言われて帰ることにしたら、年輩の部下が病気になつた。死ぬ前に家族に会いたい、必ず帰つてくるから代つて下さい。

ああいいよ。それが台湾沖で潜水艦に沈められた。今、芝の増上寺に犠牲者の名を刻んだ石碑があるけれど、一歩間違えば、そこに分部と刻まれてるんだよね。

昭南島では現地の高校の一、二年生くらいの青年を探つて半年間日本語を教えて、その後はみんなで手分けして技術を教えていた。8月15日に、たまたま支社に出ていたら、午後、送信所の現地人の代表が来た。何だろうなど出たらいち早く日本の降伏を知つていて僕に挨拶したいって言うんだね、「分部君こういうことやりたいんだ」「やりましょう」で随分可愛がられて、他の人はサイパンだ。でも一つだけ違う。日本人は僕らイギリス人だつていい人もいれば悪い人もいる。日本人もそうだ。

あなたには大変お世話になつた。でも一つだけ違う。日本人は僕らに仕事のやり方をただで教えてくれたけど英国人は謝礼を取つた。私たちがあなたの方のお蔭で自分で出来るると自信がついた。心配ありません。一日も早く家族の許に帰つてくださいって言うんだね。

昭南送信所は島の西南のゴム林の中にあって、僕は2年ほど社宅で彼らの家族とも一緒に暮らしていった。誰か病氣すると薬を飲ませたり、ビタミンの注射をうつてあげる。栄養不足を補うために軍政鑑部から特別の配給もらって、月に一回くらいかな、職員や家族全員一緒にパーティもやつた。まあ仲間なんだよ。それでお別れに来ててくれたのかと嬉しかつたねえ。

後は帰国することしか頭になかつたけど連合軍に施設の引き継ぎが必要なんです。スイッチを入れれば通信できるようにして英軍に引き渡した。機材リストも作つて、博さん(GHQ推薦の電波関係法令審議室主査。元ラジオ東京業務局次長)が支局長で、鳥居さん以下14人が牢屋に入れられた。容疑がさっぱり分からなかつたけど、2ヶ月くらいで釈放されてね、石炭船で12月8日に日本に帰つた。

それで本社に挨拶に行つたら、人事課長に呼ばれて「この会社はもう先がない。よそ行つてくれ」が行つてくれと言つんで行つたん

だ。帰ってきた途端にやめろってなんだ」「じゃあどうするんだ」「小山送信所に帰る」。で、小山に行ったら、台湾に行けって言った上司が所長で、「やあご苦労だった。君ならウエルカムだ」。女の子だけで仕事ができないんだ。

民間放送に来ないか いやあ、今更中波なんて

昭和23年の始めですか、毎日新聞のラジオ準備室長は後の毎日社長の田中香苗さんだつたけど、鳥居さんが主幹で、小山の送信所に来られた。「民間放送が出来る手伝ってくれないか」「いやあ、僕は送信以外知らないし、出来ることがあるんですか」なんてやりとりした。

無線局の設計はシンガポールであちこちやつたし、今更ラジオなんてという思いもあるし、上司に話したら、「手伝つてあげなさい。東京本社に転勤させるから」。それで単身赴任してね。毎日5時に勤務が終わると毎日新聞へ行つてお手伝いです。僕は送信所には溝の口を選んだ。南にサブスクライバーが多いからそつちに電波を強くしたらいいつて。

民放はおもちゃ放送局とはなんだ、50kwで申請すべきだ

ラジオ東京は、元日商會頭で、初代社長の足立正さんが、50kwじゃなければ社長を引き受けないと主張して50kwになつたんだけど、僕にもこんな話があるんですよ。

NHKの技術部長だつたかな、『電波日本』という技術の雑誌に送信設備の設計をして、機械の仕様書も作つた時、南北朝鮮の情勢が緊張してきた。国際電気通信がビジイになつてきただので、上司が「帰つてきてくれ」。それで田中さんに、「僕が生涯をかけた仕事が忙しくなつてきたのでこれでやめさせて頂きます」。そう、三、四ヶ月いましたかね。



熱心に語る分部さん

仕事が忙しくなつてきたのでこれでやめさせて頂きます」と言つたんですよ。たかが10kw、N H Kは100kwだが「おもちゃ放送局」と書いていた。それで、田中さんに「失礼な記事です」と言つたんですよ。

C C I R(国際無線通信諮詢委員会・世界中の電波の周波数を割り当てる国際機関)も東京地区に50kwのクリアチャンネル(世界の各地域の優先的チャンネル。混信を避けるため、その地域では他局は同一周波数を使用できない)を割り当てている。なのに誰も申請していない。だから向こうはバカにしている。ケシカラソ記事で、(当初経済効率がいいとの判断から、各社とも10kwで申請していた:「東京放送のあゆみ」)。C C I Rが割り当てる950KCを申請すればN H Kに失礼なことを言われないで済む。「そうか、分部君、反論を書いてくれ」。で、950KCを申請すれば50kwで放送出来るといふ反論書いたんです。

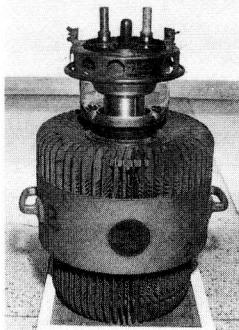
その後、足立さんが「50kwじゃなければ社長を引き受けない」つて頑張った話を聞いたただけですね。僕は技術者としての義務と正

義感から田中さんに申し上げたんだが、足立さんは経営者として判断されたんだね。

ついに口説かれてラジオ東京へ RCAの送信機が魅力だった

24年に茨城県の八俣送信所長になつて、50kw送信機3台でNHKの海外放送や日米国際電話通信やなんか、技術的には非常に面白い仕事をしていた。ただね米国兵に監視されながらだつたんです。

そして26年かな、遠藤さんが職場に見えて、「送信所長がないんだよ。50kwの送信機を扱つた人間が欲しい」。シンガポールでは、仕事上で遠藤さんと直接の関係はなかつたけど、いろいろ指導される立場で人柄は存じあげていた。こりやあ困つたな。何とか食えていたし、本心ではあまり興味がないわけです。そしたら上司がね、「遠藤君知つてるんだろう」「え



RCA社製送信管

え尊敬しています」「何回も足を運んできている。彼には誰かつけあってなければと思つて」。家内も東京に住めるんだからと言う。中波に落ちぶれるなんてやだなあつて気持ちに変わりはなかつたけど。ただRCAの送信機は魅力だつた。しかも空冷で。われわれのやつは短波でも水冷、空冷なんですよ。それ見るのも悪くないなあと決めたわけ。

それで実際に見てみると、違いますねえ。日本は20年は遅れいると思つた。部品なんかでも日本では見られないものが沢山あつた。8月頃、遠藤さんが来られたので、じゃあお世話になりますつてラジオ東京にきたわけです。

50kw送信機は、空冷の真空管が秘密兵器の一つで海軍の許可がないと買えなかつたのを、足立さんは付いていなかつた。

遠藤さんは、「君に送信所長をやつてもらう、12月のクリスマスイブが開局だから頼む」つて。

9月はじめに、まだ電通の中にあつたラジオ東京本社で鹿倉専務

(元毎日新聞社専務、TBS二代目社長)に会つたんです。そしたら、「役人やつた人間には会社勤めていて決して役人とは思つていません」「まあ一所懸命やつてくれ、役所と違うから覚悟が要るよ」。ちょっと頭に来たんですね。顔見たつてムツツリであれどしう。後でそれが魅力なんだとか分かつたんだけど。

君、戸田のアンテナは50kwには使えないよ

それで遠藤さんの部屋に行つたら、元NHKの技術局長という人がいて、突然、「君、送信所長やるんだって」「そう言われています」「戸田の送信所のアンテナは50kwでは使えませんよ」って言うんだよね。ある新聞の電波準備室顧問だった人でね。ラジオ東京設立の中心になつた4社(朝日、毎日、読売の各新聞社と電通)の準備室からは立派な技術者が来ていい筈だ、それなのにこんな重大なことを口にするのは、ひょっとする僕の技術力を試すつもりかなあなんて、ちょっと憮然としたけれど、まあ、現物をみてから対策

を考えようと思つて一礼して部屋を出たんですよ。

戸田送信所には9月5日に行きました。バスを降りて辺りを見渡すと、荒川の河川敷で、隣はボートコース。20年もジヤングルや森林や雑木林の中で仕事してきたから、長年灯台守のような生活をさせてきた家内や子供たちにやつと普通の暮らしをさせることができるとかなとほつとしたのも実感ですね。

局舎は50%、送信機器は10%ほど到着していて、アンテナ関係は着工開始という状況でね、イブに開局するのは容易じやないと思つた。私が送信所の設備配置図や放送機の説明書類を見たのは初めてだつた。信じられる?。

期待のRCA送信機の装備や性能はどうでした。

超高級車だね。音の切れ味のよさは最高。計器も見やすく、扱つてみてなにより有り難かつたのは塗装やメッキの技術がシックカリしているのか、剥げ、汚れ、変色がない。自動車産業の伝統があるからだと感じたなあ。

送信所の一同は自分の車を手入れするようにメンテナンスをして

くれましたよ。後の話になるけど42年には、運転時間が10万時間を突破した送信機はRCAの歴史にきましいということでTBSに感謝状が贈られた。オペレーション・エンジニアには最高の賛辞です。

しかし、大電力送信機に共通の悩み、突然異常な電流がながれてオーバーリレーが働いて止まってしまう事故なんだけど、これには4年ほど苦しんだね。

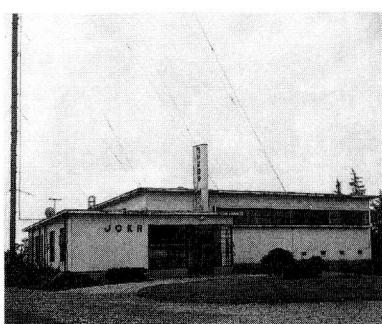
組み立て、調整をやつてくれた東芝の技師は、僕らと一緒に本当に一生懸命やつてくれた。最初の設計者じやないと勘どころを掴みにくい現象なんで、放送開始から4年間くらいは瞬間停波がしばしば発生して、新聞に「お詫び放送局」なんて揶揄され、皆、悔しい思いもしましたね?

ところで、例のアンテナは?

結果的に言えば使つたんです。塔体の直径も細くて電波の発射効率は良くないけど、その分を送信電力を上げて補えば規定の電波を発射できると考えての決断です。

ところが意外な障害が発生した。

あのアンテナは大電力で使う時に落雷に弱いんです。NHKでは



初期の戸田送信所

大阪局でタワー・アンテナ型を採用していたけど、支線碍子が空中雷で容易にスパークするので対策に苦労していたらしい。私のように短波の指向性アンテナを扱つていて人間は知らない現象だった。

12月になつて放送機とアンテナをつないで試験放送を開始して、しばらく後に突然、放送機が異常音を発して停止した。KDDの50kw機で海外放送を送信している時の落雷事故を思い出出して、外に出でてアンテナを見ながら送信機をオシセると数秒後に最高部の支線碍子が落雷現象のようにスパークする。タワー・アンテナには塔の下部に避雷装置が付けてあるのに、なんで最高部の碍子に放電するのか、空中線工学の権威にお聞きし

ても、NHKが研究をしているとしか分らない。それで家にある戦前の文献を漁っていると「碍子に避雷針をつけたら」というヒントが浮かんだんです。それを東北大学の内田教授に相談したら、「面白い考えです。教室で実験してみますよ」って言つて下さった。その結果が「GO!」。で、メーカーと相談して、数年後に完成したんです。昭和45年、この『タワーアンテナ避雷装置の考案』で、私たちのグループが民放祭賞を頂いたんです。

開局前夜祭、頭狂いそうだったまあよく出来たもんだ

そうして12月24日の開局前夜祭を迎えるわけですよ。送信所のコントロールデスクにみんな座つて、一人ずつ送信機の緊急リカバリーボタンの所に交代で立つて。ただ、アンテナが故障したらどうしようと思つたけど、そんなこと考えたら頭狂いそうだった。

僕はまあ送信所の一部署だったけど、ラジオ東京総体が、失礼な言い方だけど、全員が放送には素人ですよ。制作も、編成も、よくやつたなあ、それが僕の気持ちで

すよ。若かったこともある。技術陣にしても、本当に専門家と言うとね、この会社に来てから専門家になつたっていう人が大部分です。よ。私が入るときでも、先輩が、「よせよせ、聴取料をとるNHKがある。商業放送なんて成り立つ

る。若かったこともある。技術陣にしても、本当に専門家と言うとね、この会社に来てから専門家になつたっていう人が大部分です。それが、自分がやるようになつた苦しみだけで、楽しくなくなつちゃつた。送信機はいつ止まるか分からないんだよ。

嬉しい余談

昭南島時代の青年が訪日して



戸田送信所の当直日記

余談だけど、僕がシンガポールで教えた青年たちがいましたね。その一人が、昭和40年代の半ばでしたか、東京に来て、私がラジオ局長の時かな、帝国ホテルに呼ばれた。マレーシアの大尉になつていてね。「分部さんのおかげで、こんな身分になれました。何エーカーの土地も持つて、車も三台持つてます」って言うんだよ。で、分部先生は車は何台お持ちですかって聞かれて、ウン、私は自転車を二台持つてるなんて話をしたことがある。懐かしいですねえ。

は、じかに近所の人からも「おめでとう」なんだ。これが違うんだよ。一般の人から喜ばれる仕事をしたのは初めてだつたからね。

僕は昔、一日にバスが二往復な

分部芳雄氏

国際電気通信からラジオ東京へ。初代送信部長、TBSラジオ営業局長、ラジオ局長、取締役。